



# からしだね

2023年6月号  
(593号)

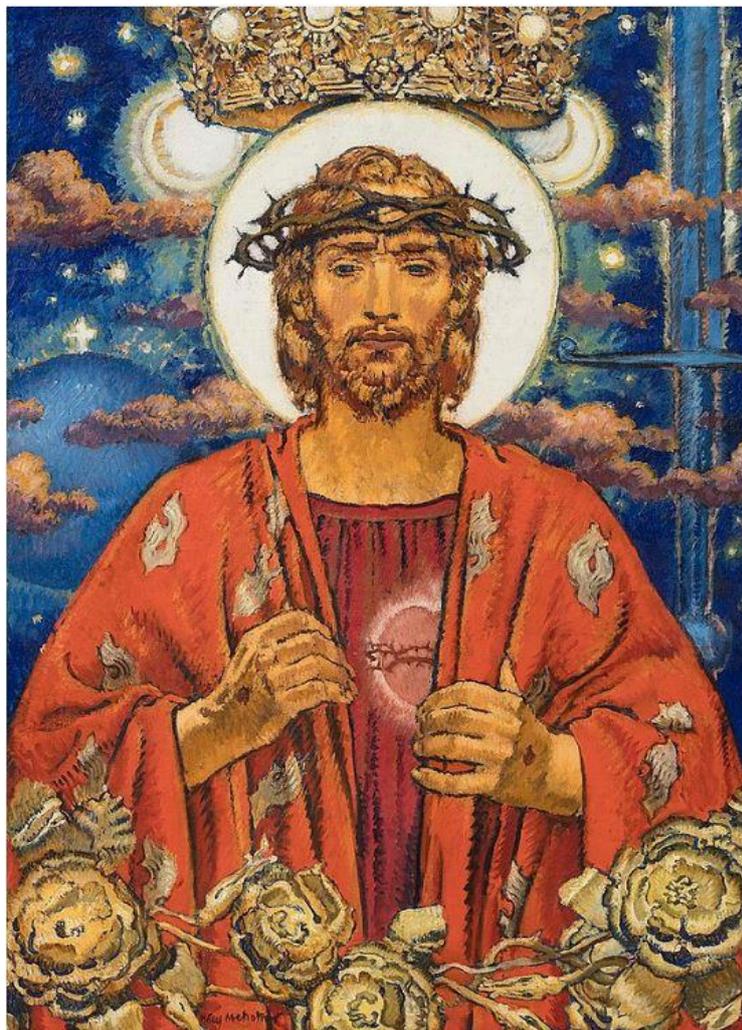
キリストの受難 カトリック池田教会

主任：中村克徳司祭

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm>



## 本号の記事の主題など

「イングリッシュ・ガーデンは好き？」  
来住英俊神父

6月のガラスケースのみ言葉と解説

みんなの談話室  
マテオ神父とカール神父の事  
御ミサで歌うこと、歌えること  
宝塚黙想の家からのお知らせ  
今月の表紙絵について

## 巻頭言

## イングリッシュ・ガーデンは好き？

御受難修道会司祭 来住英俊

私は車椅子生活をしている。ほとんど室内で暮らしているので、晴れた日には戸外に出て、陽に当たるようにしている。パウロ館と黙想の家の間に細長いスペースがあって、色々な植物が植えられている。クリスマス・ローズ、ミュージック、いぬばら、梔子(クチナシ)など。アイルランド出身の庭師が世話をしてくれている。どうやら、ささやかながらイングリッシュ・ガーデン風の庭らしい。日本風の庭とはかなり違う。私はパウロ館に来るまで、庭を楽しむ習慣を持っていなかったが、イングリッシュ・ガーデンとは良いものだと思った。

まず、植えてある花や草木の種類が多い。そして、花は刻々、咲き変わっていく。その姿は乱雑ではないが、いわゆる端正でもない。花々は咲き溢れるという感じである。車椅子に座ってその中に佇むと、樹木や草花に包まれるような気持ちがある。子供の頃、バーネット女史の『秘密の花園』という児童小説を読んだが、子どもたちが出会う花園はこういうものかと思った。

日本の庭は、植えられている草木の種類が少ないような気がする。色彩の変化も少ない。新聞やテレビで名所として紹介されるのは、必ず、桜とか水仙とか、同じ花が大量に見える風景である。俳句には「花野」という季語がある。秋の草原に色とりどりの花が咲き乱れる様子を表す。だから、そういう風景を美しいと見る感受性がないのではないが、日本ではあまり育たなかったようである。

日本の庭は綺麗に刈り込んである。外に向かって溢れでるといふ趣きではない。そして、その中に包みこまれるより、少し距離を取って眺めるもののような気がする。縁側に座って、煙草を飲みながら、楽しむのが似合う。落語に出てくる庭道楽の隠居はそうしている。盆栽は欧米でも人気があるが、日本の庭は大きな盆栽なのではないか。

私はイングリッシュ・ガーデン風の庭が好きになった。ここから教訓(moral)を導き出すなら、多様性の魅力を実感したような気がする。日本の教会は外国出身の信者と一緒にやって行くことになるだろう。困っている外国人のお世話をするのはではない。一緒に生きて行くのだ。そこでネックになりそうなのは、日本人の「きちんとやらなければ」という、それ自体は決して悪くはない拘りである。拘りというより、美学かも知れない。外国の教会には、月々の維持費という制度がないところもあると聞く。信者名簿という発想がないところもある。日本人は、維持費制度がなくて教会がきちんと運営できるのかと不思議に思う。しかし、その国ではちゃんと運営できているらしい。信徒が教会にお金を出さないわけではないが、お金を集める仕組みは維持費制度だけではないようである。私はその国のやり方をよく理解できないが、逆に、私がこの話をした外国人は維持費の意味がつかめないうだった。

多様性にただ耐えるのではなく、「へえ、こんな考え方もあるのか」と楽しめるようになれば良いと思う。相談はそれからだ。イングリッシュ・ガーデン風を親しむことは、ちょっとした予行演習になるかも知れない。パウロ館の小さな庭を見に来ませんか。

6月のガラスケースのみ言葉

これは、あなたがたのために与えられるわたしのからだである。  
わたしの記念としてこのように行いなさい

ルカ 22 章 19 節

## 6月のみ言葉についての解説

中村克徳 神父

ふとテレビをつけてチャンネルを回してみると、食事をメインテーマにした番組が多いことに気がつきます。それは、美味しいと巷で評判のレストランのお勧めメニューであったり、郷土料理や新鮮な野菜と珍しい食材を用いたものを紹介するものであったり、番組内容は多岐に及ぶものですが、多くの視聴者が食べてみたいと興味を持つように構成されています。その場所が近場であるなら今度足を運んでみようかと思う人も多いのではないのでしょうか。美味しい食事はわたしたちの日々の生活に活気と潤いを与えてくれます。

時間に追われる現代社会では、家族が揃って食卓を囲む日は少なくなっていますが、家族が一堂に会して食事をするのは、家族間のコミュニケーションの重要なひと時であることに変わりはありません。聖書の時代は食事の機会がとても大切にされていました。イエス様の時代のユダヤ社会において、食事を共にするのは最も重要な人と人との交わりの機会だったのです。

イエス様が受難に遭われる前に弟子たちと夕食を共にした、いわゆる「最後の晚餐」は、安息日が始まる金曜日の日没後に家族が揃って食卓を囲む伝統的な形式で行われました。一般の家庭であれば、家長である父親が18の祝福（シエモネ・エズレ）と言われる祈りを捧げ、祝福されたぶどう酒を家族で回し飲み、パンを食します。伝統的なユダヤ人の家庭では、多少の違いはあれ現代でも同様の食事が行われています。

イエス様はこの食事に特別の儀式を付け加えられました。それが表題にあるイエス様のからだである聖別されたパンと、イエス様の血である聖別されたぶどう酒です。ここでイエス様が言う「記念」とは、単なる思い出としての記念ではありません。ギリシア語の「ἀνάμνησις（アナムネーシス）」を直訳すれば、「想起」という言葉が当てはまります。つまり、「あたかも今ここで、それが行われているかのように思い起こす」という意味です。

これは御ミサを通して、イエス様が最後の晚餐で行った御聖体の聖別と、十字架の上で命をささげられた新しい過越しの神秘が、秘跡という形を通して同じ意味と重みを持って行われているということです。言い換えれば、わたしたちは御ミサをお捧げする毎に、最後の晚餐で当時の12使徒が体験したのと同じ恵みを秘跡としていただき、十字架の上で流されたイエス様の血と同じ恵みを受けているということになります。

御ミサは「感謝の祭儀」と呼ばれます。御ミサの中で司祭が唱える奉獻文も、御聖体も、ギリシア語では同じ「εὐχαριστία エウカリスチア」で表されます。わたしたちも御ミサに与り御聖体をいただく度に、新たに命をお捧げ続けてくださっているイエス様に、心からの感謝をお捧げしましょう。

## みんなの談話室

## 池田教会の始まりを担われたカール神父様とマテオ神父様のこと 岩尾

御受難会の一神父様からノイ神父様に送られてきたメールをシェアして頂きました。懐かしいカール神父様とマテオ神父様のお若い時の様子ですので、教会の皆さまとシェアしたく、訳してみました。

マテオ神父様はピッツバーグ、聖ミカエ御受難会の管区、聖パウロ修道院の近くで誕生されました。

マテオ神父様と、双子のご兄弟ヘンリー神父様は、その地域で、育ち、地域から、多大の影響を受けました。中でも印象深かった事は、中国に派遣される、御受難会の宣教師たちを送り出す式典でした。その結果、二人の神父様は中国に行って働きたいという、強い思いを抱くようになりました。二人は中国に派遣されている宣教師の何人かと個人的に文通をして、その宣教師たちの仕事に関心を持ってフォローするようになりました。シカゴの御受難会の神学生であった時、二人は、中国で働く宣教師たちをバックアップするために、“ジェンマ リーグ”というグループを立ち上げました。このグループは、3つの大きな養護施設と、他のいくつかの学校とから構成されていました。子供たちは祈りのカードや、ポスターで宣教師を支え、宣教師たちのために祈ることを知りました。1938年にマテオ神父様は司祭職に叙階され、しばらくの研修の後、数カ月セントルイスに、その後、シカゴの御受難会に配属されました。若いメンバーから成り立っている、“ジェンマ リーグ”は、この頃には、5000名にもなり、“十字架の同志”という団体の支部に成長していました。1940年に神父様は神学生の指導者に、任命され、シカゴ、デトロイト、デモインの御受難会神学校で指導に当たられました。この頃に日本への基礎固めを任命されました。(中略)

カール神父様の背景も、なかなか興味深いものです。御受難会の修道院の近くに生を受けられたわけではないのですが、私たちの管区の家のあるシカゴで初めての光を見られました。14歳の若さで、セントルイスにある御受難会の神学予備校に来られました。1938年にカンザスの聖パウロ教会において正式に司祭となり、現在も行われていると同じように、哲学及び神学の勉強しつつ、シンシナティの十字架の黙想の家で、神のみ言葉をより効果的に伝達する話し方の訓練も受けられました。これらの、決められた勉強を終えて後、神父様は、デモインに、後にシエラマードレに赴任されました。1948年の春、神父様は、中国への宣教団に加わるよう、任命されました。そして同じ年の7月9日に、極東に向かって出航されたのです。しかし、1949年の1月には、アメリカに戻り、シンシナティの黙想の家の副指導者をされる事になりました。中国に長く居られなかったのは、共産党の支配が強まったためでした。1950年、アラバマ、エンスリーに、派遣され、その能力を認められ、1953年1月10日、日本に行くようにと告げられました。



左からマテオ神父様とカール神父様

二人の神父様たちにとって、日本に行くという任命は、全くの、驚きでした。両者ともに、自分から言い出されたのではなく、日本に行くと、期待しておられたわけでもなかったのです。しかし、2人は、幸せでした。なぜなら、「それは、主のお望み」であり、

「主の、明白なご意志である」からです。2人は、期せずして無意識のうちに、400年前に、フランシスコ・ザビエルによって書かれた言葉を表現されていました。

“私たちを大いに慰め、神のお慈悲にますます希望を抱かせる一つの事は、自分には、異教の地で、福音を述べるに当たっての必要な、才能がすべて欠けているということの自覚です。私たちがなす事のすべては、私たちの主なる神のみの為、私たちの希望と確信は日々強くなって行きます。即ち、神は、神の働きと栄光を前に進める私たちに、必要なものは、豊かにお与え下さるという希望と確信です。”

## 御ミサで歌うこと、歌えること

Y.K.

主のご復活おめでとうございます。東京にいますY.K.です。皆様いかがお過ごしでしょうか。私は相変わらずアウグスティヌスを読んで、何とか修士論文を書こうとしております。

さて、この前の待降節からミサの式次第が変わりました。私はだいぶ慣れてきましたが、やはりまだ戸惑う部分もあります。コロナで歌唱が制限されているうちに式次第が変わり、もう高田三郎の栄光の賛歌を歌うことがないと思うと少し寂しくも感じます。しかし実はミサ曲 (Kyriale) だけではなく、歌ミサの楽譜も全て公開されているのはご存知でしょうか。いまや「それはどうとい大切なつとめです」、「主よ、あなたの死を告げ知らせ…」の箇所も全て歌唱することができます (下記リンク参照)。

私は、この四旬節からご復活にかけて、高校の姉妹校の後輩のカテキズムをお手伝いさせていただくことができました。洗礼後の講座 (= ユスタゴギア) の最終回は講座の司祭の司式でミサをすることになりました。せっかくなので新しいところも含めて全て歌ミサでやるように神父様にお願いしました。ミサの前に講座のメンバーで歌の練習をすることにしたのですが、その前準備として部屋で楽譜を確認しながら、今こうやって寄稿記事を書いています。

後輩のユスタゴギアで自分の教会生活を振り返る機会があったのですが、自分は池田小教区でいろんな人に迷惑をかけながら、愛情を注がれ育ってきたことを思い起こしました。私は池田の小教区で毎週のようにしていた美しい歌ミサがとても好きです。『典礼聖歌』を改めて開くとミサ曲1、2はもちろん、ミサ曲5や「やまとのささげうた」も歌っていたことを思い出しました。楽譜を少し見ただけで今でも歌えるほどに身体に染み付いています。池田の歌ミサは私の典礼の原点です。

教会での感染症の対策もある程度緩和されてきたいま、少しずつ会衆の歌唱も許されてきているのではないかと思います。もちろん安全面への配慮は最大限になさなければならず、神父様や典礼委員の方もたくさん苦勞されていらっしゃると思うのであります。そんな中であって、御ミサで歌うことの喜び、歌えることの恵みを噛み締めながら日々の信仰生活を送っていきたい。そう思います。

<https://www.cbcj.catholic.jp/2022/10/13/23391/>

## 宝塚黙想の家からのお知らせ

- 日帰り黙想会 10:00~15:30  
6月13日(火) 指導: 稲葉 善章 神父  
6月22日(木) 指導: 染野 治雄 神父  
6月23日(金) 指導: 山内 十束 神父
- 一泊黙想会  
6月13日(火) 17:00~14日(水) 15:30  
指導: 稲葉 善章 神父  
6月15日(木) 17:00~16日(金) 15:30  
指導: 染野治雄 神父
- カトリック教会のカテキズム  
6月14日(水) 10:00 ~ 12:00  
6月28日(水) 10:00 ~ 12:00  
指導: 染野 治雄 神父
- 聖地エルサレムを学ぶ  
6月08日(木) 10:00~12:00  
指導: 笹田六合豊 修道士
- 聖書の基本  
6月07日(水) 10:00 ~ 12:00  
6月21日(水) 10:00 ~ 12:00  
指導: 山内 十束 神父

上記の各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎ 0797 (84) 3111



パウロ館の周りのイングリッシュ・ガーデン



黙想の家の南にある和風庭園

## 今月の表紙の絵について

6月16日(金)はイエスのみこころに思いをはせる日です。その日にはマタイによる福音11章25節から30節までが読まれます。節の後半で、イエス様は疲れた者、重荷を負う者に「休ませてあげよう」と呼びかけます。この世の苦難に打ちひしがれている者にとって、なんと優しいお言葉でしょう。「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」軛とは具体的にどんなものなのか。それは車を引くために牛馬の首の横にかけられる横木のことです。重荷をぎっしり積んだ車を引く家畜のように、苦しいばかりの人生を歩む人々にイエスは声をかけられたのです。そのお言葉は人生のさまざまな重荷で疲れ果てたときのわたしたちの心にも強く響きます。表紙の絵はポーランドの画家、ユゼフ・メホフェル(1869~1946)が1930年に描いた油彩画です。「イエス・キリストのみこころ」という題名で、イエス様が手の甲に傷跡のある両手で衣をかき分け、茨の冠をつけた心臓をそっと示しておられます。

## 編集後記

やや大きい地震の頻度がこのところ増えている。コロナ前のようにいろいろな催事が元に戻りつつある中、頻発する地震速報を目にすると何かどうも気持ちが落ち着かない。

あれやこれや不安がってもどうしようもないので、備えを確認したり、家族での避難場所を話し合っている。

迫りくる巨大地震では大きな被害は免れないだろうけど、神様、何よりも犠牲者を最小限にしてください。

Ana